

さんま棒受網漁船によるアカイカ釣兼業試験

開発調査センター 漁業第三グループ

研究の背景・目的

1. 水産庁が令和5年に公表した「海洋環境の変化に対応した漁業の在り方に関する検討会」のとりまとめでは、近年のサンマ、スルメイカ、さけ類の漁獲量減少に対して、「漁法や漁獲対象魚種の複合化・転換」が1つの方向性として示されました。
2. 我が国のさんま棒受網漁業は、サンマを漁獲する主漁法であり、生鮮のサンマを国民に供給する重要な役割を担っています。しかし、我が国のサンマ水揚げ量は平成20年の約35万トンから令和4年には約1万8千トンへと著しく減少しており、経営が不安定となっています。また、サンマの漁期が8月～12月の5ヶ月と短いことから、漁船稼働率の低さや乗組員の雇用継続性も課題となっています。
3. さんま棒受網漁業の経営安定化と漁船稼働率の向上を目指して、開発調査センターはさんま棒受網漁業の兼業プランを検討し、漁灯を使う漁業として親和性が高いアカイカ釣漁業との兼業実証試験を行いました。

さんま棒受網漁船を中型いか釣漁船（專業船）と同等の機器を装備した兼業船（図1）に改造し、アカイカ釣漁業の盛漁期（5～7月）に北太平洋中央部の東経海域（図2）で專業船に混ざって操業し、さんま棒受網漁船によるアカイカ釣兼業が成立するか検証しました。

研究成果

1. 兼業船への改造は、①船を大きくしない、②船の形状は変えない、③さんま棒受網漁業からアカイカ釣漁業への装備変更が容易の3点をコンセプトとして、自動いか釣機の設置とLED漁灯の配置替えに加え、パラシュート型アンカーの使用に必要なウインチやスパンカー（三角帆）などの船位安定機器、樋や作業台等、アカイカの船上加工に必要な機器を設置しました（図1）。改造に要した期間は4.5ヶ月（設計期間などは含まず）、費用は約18,000万円でした。さらに、兼業船をさんま棒受網漁船に戻す作業も重要です。アカイカ

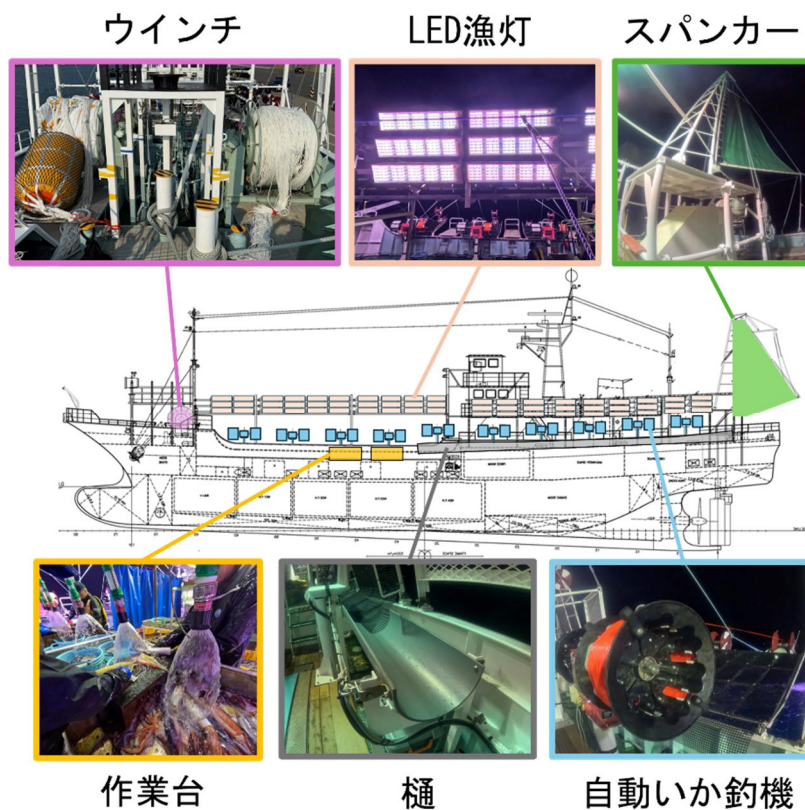


図1 專業船と同等の機器を装備した兼業船

釣漁業の装備品の取り外しに3日間(1日7時間作業)、さんま棒受網漁業への装備復旧に4日間(1日7時間作業)を要しましたが、いずれも乗員15名で行うことができました。

2. 兼業船により北太平洋中央部の東経海域(図2)でアカイカ釣漁業を実施しました。自動いか釣機1台あたりの漁獲量(10.5kg 詰めの製品数)は、兼業船が 4.6 ± 2.5 ケース、専業船が 5.7 ± 2.7 ケースとなり、ほぼ同等の漁獲量が得られました(図3)。兼業船の操業36日間の収益(市場での売り上げ)は約4,400万円でした。

3. この結果、さんま棒受網漁船によるアカイカ釣兼業は、改造費を別にすれば、本調査時と同等の漁獲量及び販売価格であれば利益が得られると見込まれます。

アウトカム

1. 本調査に参加したさんま棒受網漁船は、令和8年度に兼業船としてアカイカの商用操業を行う予定です。
2. 本結果を受けて、他のさんま棒受網漁船も兼業を検討しています。

本成果の公開情報

1. 令和7年度海洋水産資源開発事業(速報)(兼業いか釣(さんま棒受網:北太平洋))

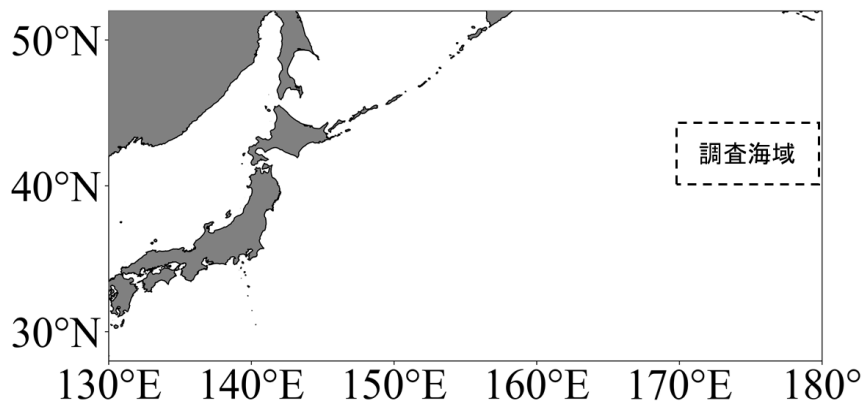


図2 調査海域

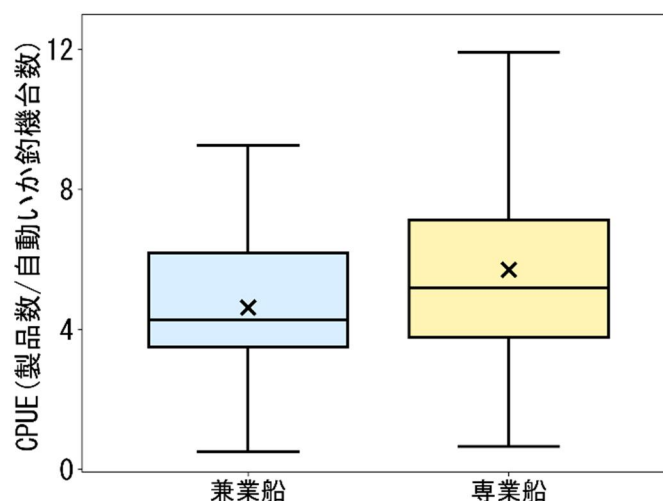


図3 兼業船と専業船の自動いか釣機1台当たりの漁獲量の比較
(箱内は中央値と四分位、×は平均を示す)